

# 現代ロシアの銀行制度について

## —金融業界の構造—

拓殖大学 山村延郎

ロシアは、昨年の夏以来、欧米をはじめとする各国の経済制裁を受けている。中でも金融制裁が重要で、昨今のルーブル下落の重要な遠因といえる。ところが現代のロシア金融制度について、ロシア経済の専門家ならまだしも、多くの金融論者には、ほとんど知られていない。そこで本稿では、ソ連崩壊前後の金融制度の成立史、ロシア中央銀行統計にみる銀行業の全体像、銀行番付に見られる主要金融機関の具体像を洗ってみた。

従来、ロシア・東欧の銀行制度は、モノバンクからデュアルバンク制度に移行したと言われた。確かにロシアでも、ゴスバンク(ソ連国家銀行)から専門銀行が分かれ商業銀行部門が形成される中で、市中銀行と中央銀行の二層制になった。しかし国有銀行が資産規模においても支店網においても圧倒的であり、金融政策の点で三層制と考える説も出ていることに注目したい。また、金融業界をみると、従来は、その出自から専門銀行と商業銀行に分けて捉えられてきた。だがIMFの論文では、国有銀行、外資系銀行、大規模民間銀行、小規模民間銀行に四分類している。確かにこのほうが現状を理解しやすい。

より具体的にみると、ロシアの金融業界は、上位行のシェアが極めて高い。およそ900行の金融機関のうち、上位5行で全資産総額の半分以上を占め、上位20行で与信額の七割近くを占めている。他方で、最下層には日本の信組の開業資本金に満たない資本金額しか持たない金融機関がある。下位層は、自己資本比率が高く融資率が低いので、投機的な金融機関が含まれるとみえる。中堅銀行は、個人向け貸し出しなどの割合が高いなど、リテール金融の成長が示唆されるが、預貸率から見て外国からの資金流入に頼っている。支店網は、地理的な配置は地方の経済力を反映しているが、数では貯蓄銀行の支店網が半数近くを占めていて圧倒的である。全体的には増大しているが、集約・階層化しつつある。預貸率から考えて、預金集約というより与信所や出金所として機能している可能性がある。

上位25行あたりまでの銀行番付をみると、政府系と外国系の金融機関がほとんどで、一部、民族系の銀行もあるといった印象になる。2007年から2012年までの変化としては、ロシア農業銀行とロシア銀行の台頭が目につくが、貯蓄銀行、VTB、ガスプロム銀行が不動の上位三行である。この三行とロシア農業銀行が現在のロシア四大銀行といえる。昨年夏からのEUによる金融制裁は、これらを含むロシア五大銀行を対象とするリファイナンスの制限である。この点、アメリカによる制裁とは意味も影響も大いに異なっている。